



# 渡英直後のエピソード



先月号では、日本の国際芸術祭で初めて舞台照明というものに出会ってから、すぐにロンドンに飛び立ったところまでお話させていただきました。英語が全く話せないまま、下準備なしで渡英して苦労したことはお話に上げておりませんでした。渡英直後は、日本食レストランでアルバイトをしながら語学学校へ通っていました。学校のクラスメートはほとんどお金持ちの中国人でした。全く英語が話せなかった私は、初めての2週間見よう見まねで授業についていくのがやっとでした。クラスメートに日本語で「パーカパーカ」といじめられていたのを覚えています(今ではいい思い出です)。それからというもの、必死で勉強して少しはマシな英語を話せるようになりました。語学とは面白いもので、習っても習っても新しい単語に毎日出会い、習得の終わりが今でもありません。

そして数週間が過ぎた頃に、そろそろイギリスの舞台照明をリサーチし始めたいと思い、早速コンテンポラリーダンス劇場に公演を観に行きました。

その公演も照明も素晴らしかったので、公演直後に調光室に行ってみました。ノック、ノック。“Hello, can I help you?”と出てきた小屋付きテクニシャンに聞かれたので、思わず“Hello, my name is Azusa. Nice to meet you. Work please? Work please?”と、どうしようもない英語で彼に質問しました。今考えると、『千と千尋の神隠し』の一場面「ここで働かせてください!」を連発していたようなものだなと、思い出ただけで恥ずかしいです。その小屋付きテクニシャンも、「このアジア人何ものだ?!」と疑わしい感じで初めは一步引いていました。なんとか「インターンシップをこの劇場でしたいのです」ということが伝わって、その次の日から舞台裏の仕事に参加させていただくことになりました。このインターンシップは、とても肉体労働でした。演目ごとに、転換があるダンスの舞台をいかに効果的にスムーズに回すかを学ぶ一番の近道だったと思います。余談ですが、この小屋付きテクニシャンは今ではフリーになっていて、たまに私と一緒に働いています。彼は、あの頃を振り返って「君の勢いに

押されてイエスって言うしかなかったよ、ミス・カミカゼ」と笑って言っていました。

数年後に演劇系の大学で舞台照明を勉強しました。と言いましても貧乏学生だったので、ウエストエンドミュージカルのピンスポットや、他の舞台の照明アシスタントのアルバイトばかりしていましたので、学校はちゃんと行っていなかった不良生徒でした。学校よりもそのような現場で実技的なことを学んでいきました。なんてお金(学費)の無駄遣いだと思われるかもしれませんが、学校で書かなければならなかった地獄の論文と電気の勉強が後々デザインをするうえで役に立ったと思います。特に、語学では苦労しました。英語での論文を成し遂げた日には、数日にわたる宴会をしたほど、あのときの達成感は大きかったです。そして大学卒業後、学生時代に作ったコネクションで少しずつコンタクトを増やしていきました。今はフリーランスで、照明デザイナー兼テクニシャンをしています。次月号では、この大学のカリキュラムについて触れたいと思います。

